

保育者の音楽的「表現」のとらえかた（1）

—保育室の音についての意識—

○志村 洋子 奥村 正子 坂田 直子

（埼玉大学）

1. 問題の所在

現代の乳幼児は、日常生活のあらゆる場面で多種多様な音楽に取り巻かれた、豊かな音楽環境に生きている。しかし一方、幼稚園・保育所の保育室で展開される音楽活動は、保育者がピアノを弾きそれに合わせて幼児が一斉に歌ったり、幼児用楽器を分担して弾くというスタイルが一般的なものとしていまだに定着している現状がある。例えば、幼児が音声によって表現する歌う活動は、既成曲をただ保育者の鍵盤楽器の音にあわせて再生するだけのものではない。幼児はさまざまなイメージを声そのもののにせ表現しており、幼児自身の音楽的「表現」は本来、いきいきと展開して行くはずのものである。

本研究は、幼児自身の音楽的「表現」に目を向け、幼児の表現を基盤とした保育活動を行うためには、保育者養成の場に必要となる「知性」¹⁾ともいえる音楽的専門はいついどのようなものかを、具体的に検討することを目的としている。つまり、子どもと音楽のかかわりの姿から養成のあり方を考える試みである。

今回は、子どもの音声行動や音楽的な活動を援助する為にどのような音環境が用意されるべきか、養成する中でこうした概念形成がなされる必要があると考え、まず保育室内の「音」に対する保育者の意識に視点を当て、音楽活動を支える「環境」について検討したので報告する。

2. 日本の保育者の「音」に対する意識

幼児自身の音楽的「表現」の微細な変容や音声行動の微妙な感情性²⁾は、どのような音環境の中で生まれ展開したものであるかが重要な意味を持つ。これまでに行ってきた保育室の音環境についての音圧レベルの測定³⁾では、児同士や保育者と児の音声による相互交渉が困難な場面や、室内で活動する児の音声的反響し、保育者が音声でやりとりする際は声を張り上げなければ十分伝わらない場面も多く観察された。楽器を使用した活動で室内に音が響き過ぎる状況では、保育者は「部屋に音が響くと何を話しても聞いてくれない。」と困り果てることになる。子どもの活動を子細に見たり、さらに発展させるための助言ができる音場でないことが伺えた。

そこで、室内の音環境をどのように感じているか、幼稚園・保育所の教師・保育士を対象にアンケート調査を実施した。その際、日本だけではなく、教育的・文化的背景が異なる国についても調べ、比較する中で、日本の状況を明らかにすることを目的とした。

2-1 対象

対象は日本、台湾、スウェーデンの3カ国の、公立及び私立幼稚園・保育所のクラス担任教師及び保育士、

合計138名である。各国の内訳は以下の通りである。

日本：埼玉県内13園・所、86名

台湾：高雄市内3園、37名

スウェーデン：ストックホルム市内4所、15名

2-2 アンケート内容

表1に示した10項目からなるもので、さらに下位項目を設け各々の質問に対して5段階評定による回答を行ってもらった。質問項目の作成は日本人保育者を対象に予備調査のアンケートを行ない、抽出された音環境に対する意識からさらに項目を選択して作成した。

2-3 調査の方法

幼稚園及び保育所に調査者が持参・配布した。なお、台湾・スウェーデンでは各々中国語及び英語でアンケートを作成した。回収率は100%であった。

表1 アンケートの質問項目

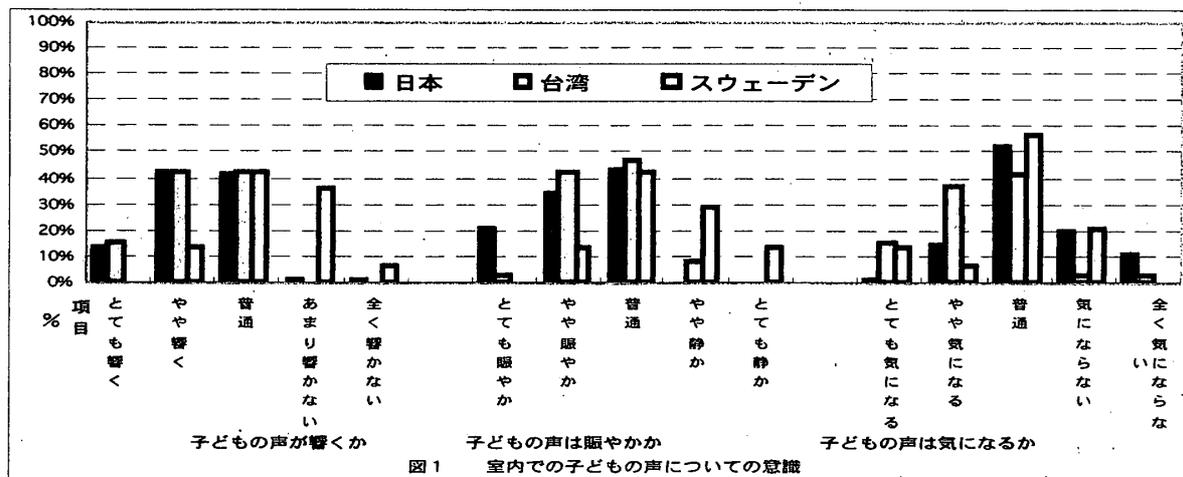
- 1 子どもの人数と広さについて
- 2 保育室内での声の響く具合について
- 3 保育者の声が子どもに届く程度について
- 4 子どもの声が保育者に届く程度について
- 5 隣室の声や音の伝搬について
- 6 楽器等の使用状況について
- 7 保育室内でのマイクروفフォン使用について
- 8 気になる音について
- 9 床のかたさについて、
- 10 のどの障害の経験の有無について

2-4 結果

ここでは、アンケート項目2・6・8・10の結果を報告する。

まず、図1に保育者が子どもの声をどの程度意識しているか、保育室内に「声が響く程度」と、それが「賑やか」と感じるかどうか、またその「声が気になるか」に分けて尋ねた結果を示す。「子どもの声の響く程度」については、日本と台湾は60%近くが「とても響く」「やや響く」と答えたのに対し、スウェーデンは14%に留まり「響かない」の回答が40%を上回った。「賑やか」かどうかについては3カ国共に「普通」としたものが最も多かったものの、日本は半数以上が「やや賑やか」「とても賑やか」と回答し、台湾もほぼ同様であった。一方、スウェーデンは40%以上が「やや静か」「とても静か」であった。さらに「気になるか」については、日本は「気になる」と答えたものが20%以下で、「気にならない」「全く気にならない」をあわせると30%以上となった。しかし、台湾は半数以上が「とても気になる」「やや気になる」と答えた。スウェーデンは「気になる」が20%で「気にならない」も20%であった。

以上の結果は、スウェーデンに比べ、日本と台湾では子どもの声が「響く」と感じており「賑やか」と意



識される傾向が見られるものの、日本では「気にならない」という保育者が多く、響きや賑やかさに慣れている可能性が示唆された。

楽器の使用状況については、アンケートの行われた1週間にピアノや合奏用楽器などをどのくらい保育活動に使用したか、その頻度をたずねた。日本ではピアノが毎日使用されたのは90%近くにのぼったものの、スウェーデンでは全く使用されていなかった。子どもが主に使用する合奏用楽器については、日本では「殆ど使用しない」が40%であったものの、台湾・スウェーデンでは「1~2回」が50%と多い結果となった。

日本の保育室内で気になる音として最も多かったものは、図2に示したように「椅子を引きずる音」で、「車の音」「子どもの声」と続いた。その他に「保育者自身の声」があり、子どもの声とともに音声気になる音と感じられていることも分かった。

音声障害の経験の結果では、経験有りの回答が多かったのは日本80%と台湾71%であった。一方、スウェーデンは36%と少なかった。障害の理由は保育中に「大きな声を出す必要に迫られて」「風邪をひいて保育を行った」が、日本と台湾ではほぼ同程度であった。障害を経験した時期と、勤務年数についてみると、日本では「勤務開始直後」が半数近いのに対して、台湾では「開始直後」と「3~5年目」が40%となり、スウェーデンは「7~8年目」が70%と圧倒的に多い結果となった。これらのことから、日本では8割の保育者が音声障害を経験し、それは勤務開始後3年内外に経験していることが分かった。こうした状況は言わば「騒音環境」といえる室内での保育が要因と考えられる。スウェーデンでは日本に比べ経験者が極端に少なかったことから、室内の静けさと関わることを示唆された。

3. まとめ

子どもの音に関する感受は、個人間差・年齢差が大きいとされるものの、成人に比べより音に関して敏感な存在であると考えられている。そうであるなら、個人差の大きい幼児の音・音楽による表現を援助する真

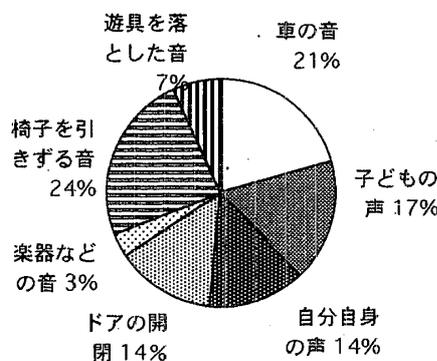


図2 保育室内で気になる音 (日本)

の環境は、表現を支える静けさと言えるのではないだろうか。子どもから表出されることばや小さな声で口ずさむうたなど「自然に駆使される」4) 声の表現を、保育者が敏感に受け止め、また更にはたらしめるために必要なはその場の「静けさ」である。

親と子が向き合い歌いあう時に背景にある静けさは、声が運ぶ微細なニュアンスもお互いの「感情」の情報として伝達している。保育者自身の音声による「表現」、例えば子どもへの語りかけや歌いかけは、周囲の音環境によってその親密さをましたり、また雑駁な表現になったりもする。保育室の建築形態が他国の状況と異なり日本では教室的であり、最近ではオープンスタイルの設計が多く、室内の吸音対策も行われていないことから、特にピアノを使用した活動の頻度が高いことは音環境に大きな影響をもたらすものとなっている。

保育者養成の場において、幼児自身の音楽的「表現」に目を向けることができる学生を育てるために、まず、子どもの表現の背景として必要な音環境についての概念形成がなされることが望まれる。

文献1)小川・林(2002):「保育者論」樹村房 p.150.
 2)志村・今泉他(2002):発達心理学研究 13-1 pp.1-11.
 3)志村・藤井(2001):建築音響研究会 AA2001-37 pp.1-9.
 4)今川・志民(2003):保育学会第56回発表論文集 pp.560-561.